

く  
も  
の  
き  
し  
ま  
ま  
に



木村裕◎作  
あへ弘士◎絵

きむらゆういち  
作者◎木村裕一

東京都生まれ。造形教室、幼児番組のアイデアブレンなどを経て絵本・童話作家に。「あらしのよるに」で講談社出版文化賞絵本賞、サンケイ児童出版文化賞J R賞受賞。作品に「ごあいさつあそび」「にんげんごっこ」「オオカミのごちそう」「あめあがり」など。

ひろし  
画家◎あべ弘士

1948年北海道生まれ。旭川市旭山動物園の飼育係のかたわら、絵本画家として活躍。1996年、退職して絵に専念。「あらしのよるに」で講談社出版文化賞絵本賞、サンケイ児童出版文化賞J R賞受賞。「ゴリラにつき」で小学館児童出版文化賞受賞。



りとり②④

## くものきれまに

1997年10月30日 第1刷発行  
2000年6月30日 第6刷発行

作／木村裕一 絵／あべ弘士  
装幀／坂川栄治(坂川事務所)  
発行者／野間佐和子  
発行所／株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001  
電話(出版部)03・5395・3535 (販売部)03・5395・3625 (製作部)03・5395・3615

印刷所／図書印刷株式会社 製本所／大村製本株式会社  
N.D.C.913 48p 20cm

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にておとりかえいたします。なお、この本についてのお問い合わせは児童図書第一出版部あてにお願いいたします。定価はカバーに表示してあります。

[R]日本複写権センター委託出版物

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

©Yûichi Kimura Hiroshi Abe 1997 Printed in Japan ISBN4-06-252874-6(児一)



木村裕◎作  
あへ弘士◎絵



江苏工业学院图书馆藏

くもの きれまから、ようやくごごの たいようが かおを だした。  
ポプラなみきが いっせいに かげを おとし、みちばたの みどりが  
あざやかに うかびあがる。





「メイ、どこに いくんだい？」

ふとった ヤギが、おかを のぼる ヤギに きいた。

「え？ いや、あの……ソヨソヨとっげに。」

「えー!? あの あたりは、ときどき オオカミの てる ところじゃないか。」

「はい、でも、ともだちと やくそくしてて。」

「そうか。でも、きを つけなよ。あそこで オオカミの ひるめしに された

やつが いるんだからね。」

「ハハ、だいじょうぶですよ、タプ。」

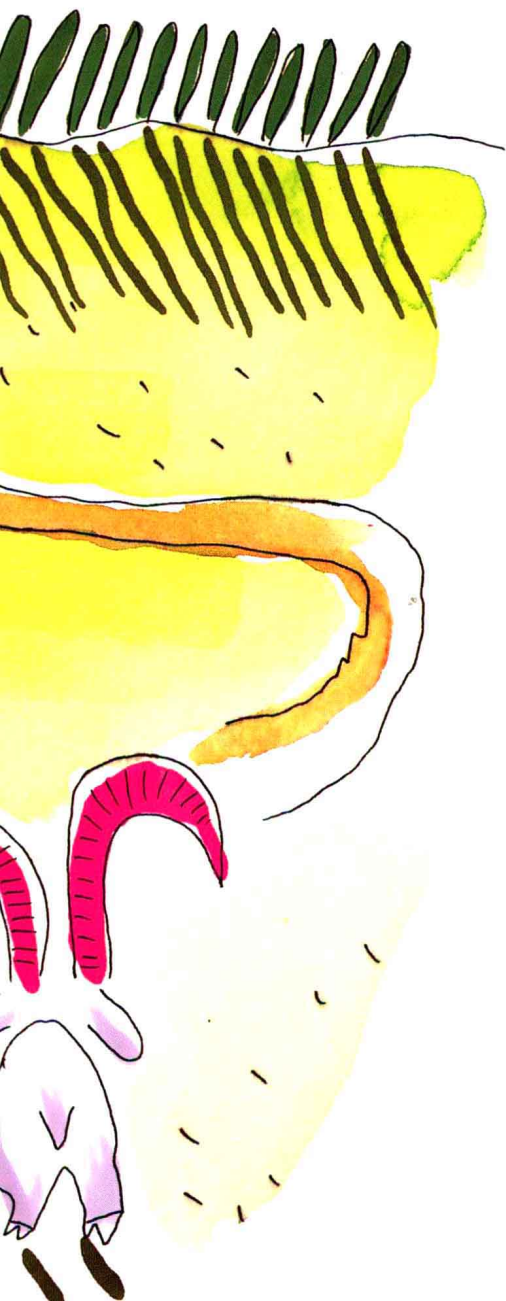
ふとった ヤギの なまえは、タプと いった。

「メイの、その のんきな ところが、しんぱいなんだよ。」

「はいはい、きを つけて 行ってきますよ。」



メイは タブに わらって みせると、おかを のぼりはじめた。  
としうえの タブは、ちいさい ときから、なにかと メイを  
かばってくれてきた。しんぱいそうな タブの まなざしを せなかに  
かんじながら、メイは ソヨソヨとうげに いそいだ。







ソヨソヨとうげで メイト まちあわせを している ともだちとは、  
なんと、その オオカミだった。

ニひきは、あらしの よるに まっくらな こやの なかで であい、  
あいてが だれだか わからないまま、かたりあった。そして、とうとう、  
ともだちに なってしまったのだ。

「やあ、どうも、

おまたせしちゃって。」

「いやあ、おいらも たったいま

きたところでやんすよ。」

オオカミが ちよっぴり

てれて、わらう。

「とちゅうで ともだちに

あっちゃんましてね。

「メイは のんきものだから

しんばいだ」って いわれて。

あ、わたしの なまえ、

メイって いうんですよ。」



「へえ、メイでやんすか。そりゃあ  
なんとも、ヤギらしい おなまえで。

おいらは ガブって いいやす。」

「ほう、そりゃ、つよそうな なまえだ。

でも、なんか へんですよね。

いまごろ、おたがいの なまえを

いいあうなんて。」

「ほーんと。このあいだの はれた

ひにも、いっしょに。ピクニックに

いったでやんすのにね。」

「ハハハ、まったくだ。」

二ひきは たのしそうに わらう。



「それでね、その ともだちが、オオカミに きを つけろって いうんですよ。フフ、いまから その オオカミに あうなんて、とても いえませんでしたよ。」  
「デヘヘ、おいらも おんなじでやす。ヤギと ともだちだなんて、ぜったい なかまに いえないでやんすよ。」

「わたしたちだけの ひみつですよね。」

メイが こえを ひそめて いうと、ガブが はずかしそうに わらう。

「そんな いいかた すると、おいら、ドキドキしちゃうすよ。なんか、おしっこ したくなっちゃった。ちよっくら、しつれいして。」

ガブが そそくさと

うらの はやしに

はいつていった。



そのときだ。

タブが さかみちを

のぼって、こっちに

やってくるじゃないか。



「ど、どうしたの、タプ。」

メイが あわてて かけよると、

「いやあ、ひとつ だいじなことを、おまえに つたえようと おもってね。」

タプは、はあはあと いきを はずませる。





「じつはね、オオカミに ひるめしに されたって やつは、ちょうど、  
おまえが たっているところに いたんだ。そこで、おもったんだが、  
ともだちを まつなら、しげみに かかれて まったたほうが いいぞ。」

「わかったよ、タブ。そのとおりに するよ。それじゃ、ありがとう。」

「くれぐれも きを つけるんだぞ。」

「はーい。」

タブが かえるのと、

ガブが はやしから

あらわれたのが、

どうじだった。

「おまたせでやんす。」

ガブは、にこにここと わらっている。

どうやら、なにも きづいていない。

メイは、ふうーっと ためいきを つく。





